



160号

2011/ 1 /1

(新年号)

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。

新年明けましておめでとうございます



「冬のおばあさんと孫」／中国・陝西省延川県(2009年2月)

撮影:丹羽朋子

‘わんりい’ 160号の主な目次

北京雑感(51)中国のお正月	2
私の調べた四字熟語(49)輾転反側	3
媛媛讲故事(30)八仙の伝説X 八仙・海を渡る②	4
農民画(16) 兔の山	5
四姑娘山写真だより(22) 復興した長坪村	6
フィールドノート(6)私的十科事典 切り紙(剪紙以外)編	8
アジアを読む(73)「憲法九条を世界遺産に」	11
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	11
福建見聞録(3) 中国人の英語	12
アフリカとの出会い(49) Mama Othaya(ママ オザヤ)	13
中国・城市(都市)めぐり(2) 済南市	14
【活動報告】第13回 町田発国際ボランティア祭・2010夢広場	15
黄土高原・やぶにらみの旅(4)	16
私の四川省一人旅(42)理塘の街で②	18
第8回 留学生トークプラザより「日本の生活」	21
‘わんりい’ 掲示板	22

【写真説明】 マイナス20度まで下がることもある陝北の冬。小さな子どもは布団にぐるぐる巻きにして抱かれます。

写真は、新春を祝う廟会で撮った一枚。おばあさんと孫の目線の先には、廟会の大衆劇がありました。家族の幸せと健康を祈って廟参りしたあとに、神様に奉納される劇を見ようと、寒空の下、周辺の村々からもたくさんの村人が集いました。

この赤ちゃんの両親は街へ出稼ぎに出ているので、村に住むお祖母さんが母がわり。二人だけの静かな農村生活も、今日ばかりは賑やかに華やきます。こんなハレの日はおばあさんもちょっとおしゃれして、孫も真新しい布団でぐるぐる巻きに。ちなみに、陝北の窑洞では、子どもがオンドルから落ちないように、打ちつけられた杭に縛りつけたひもで繋がれている光景をよく見かけます。その杭はかつては、子をまもる石獅子の彫刻が一般的でしたが、最近では立派な石獅子をもつ家は少なくなったと聞きます。

(説明:丹羽朋子)

明けましておめでとうございます。今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

ご存知のように、中国のお正月(春節)は陰暦で祝うので、今年は2月3日ですが、わりいのお便りは2月にお休みを頂きますので、ここでちょっと中国のお正月のお話をしたいと思います。

陰暦で暮らす北京の人々にとって、1月1日はどんな日なのでしょうね。1月1日だけは一応法定の休日なのですが、12月31日の午後も休みにする職場もあります。最近では、外国との関係が深い会社などは新年の休みを長く取る傾向にあるそうです。

北京の春節は、普段、雑貨を売っている店で年画(お目出度い題材を赤い紙に描いて室内に飾る)や対聯(赤い紙にお目出度い対句を一行ずつ書いて、門やドアの両側に飾り付ける)を売り始めるのが準備の合図のようです。

聞くところによると、この対聯、昔はそれぞれのお宅で独自に用意したそうで、農村では、村に何人かの字の上手な人が頼まれて隣近所の分も書いていたようですが、だんだんに既製品が売られるようになったのだそうです。世の中が進歩(?)して来ると、何でも独特の雰囲気(霧囿気)が薄れ、画一的になってしまうのは寂しいですね。

昔は旧暦12月から迎春の準備が始まったそうですが、現在はすっかり変わって、「除夕(大晦日)に家族が集まって、たくさんの餃子を作るだけ」のお宅が多いようです。

餃子は、いろいろな種類の餡(具)を用意して、たくさん作りますが、作業する人も多いので瞬間に出来てしまいます。この餃子の中の幾つかに、きれいに洗ったコインなど何か硬いものを入れます。食事の時、その餃子に当たった人は新しい年に良い事があると祝福されます。

友人の家で、一度、「いくらきれいに洗うと言っても、コインは衛生上どうか」ということになり、ピーナッツを入れて作りましたが、食べ終わってみると、ピーナッツ入りに当たった人の数が、実際に作った数より少なかったのです。何個かは、ピーナッツと気づかれずにそのまま食べられてしまったようで、その運気はどうなるのだろうと大笑いしたことがありました。

除夕の夜は花火と爆竹があちこちで始まります。78年前まで、北京の市街地での爆竹は禁止されていましたが、その時は、グリラのように少量の爆竹が時と場所を移して鳴って、北京の人々の爆竹に対する思いが抑えがたく、隙間から噴出すような感じでした。その当時

でも郊外の禁止令は厳しくないようで、遠く花火があがって、市内のマンションの高層階に住む人たちは窓から眺めて楽しみました。

次の年は、郊外のマンションで徐夕を過ごしました。その年は市街地でも爆竹の規制がだいぶ緩和されたようでしたが、ここは郊外でしたから、規制は「有って無きが如し」と言う状態でした。(因みにこの規制、その次の年には全面的に撤回されたそうです。)

夜7時ごろになるとマンションの住人が中庭に花火や爆竹を持って出てきて、次々と火を点け、花火と爆竹の競演が始まりました。花火は、個人で打ち上げるものなのですがかなり大きくて、日本では販売されていないサイズです。花火の間には爆竹に火が点けられ、大きな音が鳴り響きます。見ていて可笑しかったのは、この爆竹の音で、近くの駐車場に止めてある車の防犯装置が働いて、警報音とハザードランプの点滅を繰り返す車が何台もあったことでした。

高層階の部屋からは遠くの花火が良く見えて、夜遅くまで続いていました。遠くに見える花火は大きくて立派、変化に富んでいて楽しめました。中国の人々は本当に花火や爆竹が好きだそうです。別の機会に聞いた話なのですが、ある人が春節の花火だけで10万元(当時のレートで160万円)を使ったのだそうです。信じられないような話ですが、あの音と光の喧騒を経験すると、そんな話も納得してしまいます。

北京の人々は、春節に廟会^{ミャオホイ}へ行くのを楽しみにしていました。廟会は、日本で言う縁日のようなものですが、特定の神社仏閣の参道ではなく、昔から決まった通りで開かれるようで、私が連れて行って貰ったのは、地安門近くの廟会でした。日本のラッシュアワーを知っている友人が、廟会の人込みはラッシュ時の電車のようなだから、靴が脱げないように、カバンを取られないようにと注意してくれましたが、いざ行ってみると、だっ広い道に屋台が並んでいて人々が覗きながら歩いているだけで、聞いていた混雑も雰囲気もなくがっかりしました。

廟会をつまらなくした犯人は区画整理です。昔は、狭い道の両側に屋台が出て更に狭くなり、大勢の人が繰り出すので、独特の雰囲気(霧囿気)が醸し出され、歩いているだけで気分が高揚したのでしょう。広くなり舗装された通りに並ぶ屋台とそれなりの人出で、神仙には何の縁も無い縁日では、何かうら寂しい雰囲気が漂っていて、すっかり興ざめして帰ってきました。新しくなった北京の街並みに対して私が抱く気持ちが景色となって出現したようで、非常にがっかりしたのを覚えています。

読者の皆さんの何人かの方は、いままでに何か深い悩み事があったり、もしかしたらあこがれの異性のことがどうしても頭から離れなくて、夜に寢床に入ってから悶々としてなかなか眠られず、何度も寝返りを打っているうちに気付いたら夜が白みはじめていたなどという経験があるのではないのでしょうか。そのような状況をあらわす熟語が「輾轉反側」です。今回はこの熟語の謂れを調べてみました。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲三省堂 大辞林：

輾轉反側〔詩經^注〕・周南・閔睢(思かんしよい悩んで)眠れず寝返りばかり打っていること。

▲小学館 中日辞典：

輾轉反側(zhǎn zhuǎn fǎn cè) 輾轉反側(てんてんはんそく)、思かんしよい悩んで何度も寝返りを打って眠れないこと。

この成語の由来は〈詩經・周南〉の「閔睢」と題する下記の詩です。

寤寐思服 目覚めても寝ても思かんしよ服す

悠哉悠哉 悠かんしよなるかな悠かんしよなるかな

輾轉反側 輾轉反側す

(詩中・1行目の‘之’はここでは美しい女性を指す/2行目の‘服’は思と同じ意味/3行目の‘悠’は時間的・空間的に、どこまでも続くさま。4行目の輾轉は展転と同じ)

の「悠哉悠哉、輾轉反側。」の部分です。

もう随分昔のことでした。ある綺麗な川の中に、ひとつの美しい小島がありました。

春が来て、小島には花が赤く咲き、ヤナギが緑に萌え、水鳥が楽しげに泳ぎ、スズメが元気にさえずって、それは美しく活力に満ちておりました。

一人の若者が、朝の清らかな陽光の下を、一艘の小船を操ってこの美しい小島にやって来ました。若者は美味しい水菜を摘もうとやって来たのでした。若者が丁度島へ上陸したときに、誰かが歌を歌っているのが聞こえてきました。その歌はこんなような歌詞でした。

- ♪ 高さの不ぞろいな水菜が有ったなら、
- ♪ それは私のたおやかな左手で摘みましょう。



イラスト：叶霖(yè lín)

- ♪ すき間の不ぞろいな水菜が有ったなら、
- ♪ それは私のたおやかな右手で摘みましょう。

歌声に引かれて若者が声のする方に向かって行くと、美しく初々しい、それは可愛い一人の娘に会ったのです。若者はその年の春、初めて水菜摘みに行き、その娘に初めて出会ったのでした。

その晩、若者は眠れませんでした。彼は小島の上で娘と会った折のことを何度も何度も回想して、感情が高ぶって寝付くことができなかつたのです。さらに彼は娘とのこれからのことなどもいろいろ考えては悶々とし、右に左にと寝返りを繰り返す、枕をあちこち置き換えたりしてみましたが、とうとう朝まで眠れませんでした。

それから1年が経ち2年も過ぎ、3年目の春に若者は終にその娘と結ばれたということです。めでたし、めでたし。

■注

詩經：中国最古の詩篇である。古くは単に「詩」と呼ばれ、また周代に作られたため「周詩」とも呼ばれる。儒教の基本経典・五経あるいは十三経の一。漢詩の祖型。古くから經典化されたが、内容・形式ともに文学作品(韻文)と見なされる。もともと舞踊や楽曲を伴う歌謡であったと言われる。
(フリー百科事典 ウィキペディア)

竜宮で休んでいた竜王は、海上が騒がしいので兵士に調べさせたところ、八仙たちが打ち揃って竜宮を目指してやって来るとのことです。しかし、自分の力を信じている竜王は慌てず、自分の身体を龍の形に変えて海面から身体を乗り出し眺めてみますと丁度拍子木に乗った藍采和が近くにやってくる所でした。竜王は大きな口を開けて藍采和の拍子木を奪うと海底に戻って行きました。

実は、竜王に奪われた藍采和の拍子木は、藍采和と共に長い修業を積んだもので、これまでに天地及び日や月の精華を吸収し、凄い力を持つようになっていました。

竜王が龍宮に拍子木を持ち帰ってくると、もともと美しく耀いていた龍宮は、拍子木が吸収した日月の力でいっそうどこもかしこもキラキラと眩しいばかりに耀き、華麗に見えるようになりました。竜王は有頂天になり、兄弟達や、親友達を招いては龍宮のあちこちを一緒に巡って見て廻りました。

それでは藍采和はどうなってしまったのでしょうか？藍采和は突然拍子木を奪われて海に落ち、竜王の部下に捕まえられ逃げる事ができないように閉じ込められてしまいました。

突然藍采和の姿と彼の拍子木が海に引きずり込まれたのを見た海上の仙人達は、慌てまた焦りました。呂洞賓はこの辺りの海は東海の竜王の勢力下にあることを知っていましたので、藍采和とその拍子木を見失ったのは、きっと東海の竜王の仕業と考え他の仙人たちとどうしたらよいか相談しました。そして、まずは呂洞賓と鉄拐李が龍宮に行き竜王に談判することになりました。

二人は竜宮に忍び込むと竜王の前に現れ、呂洞賓ができるだけ礼儀正しく落ち着いて竜王に話し始めました。

「お騒がせしてすみませんが、藍采和と拍子木が龍宮に落ちたようです。どうか藍采和と拍子木を戻して頂けないでしょうか。そうしたら我々はすぐにもこの東海を離れよ

うと思っています。どうかお願いします。」

しかし竜王は何食わぬ顔で

「なに？藍采和？拍子木？わしはそのようなもののことは聞いたこともない。何のことを言っているのだ」

と言い逃れを言っていました。

竜王の言葉を聞いた性格の荒い鉄拐李は怒りました。

「この泥棒め！早く藍采和と拍子木を返せ！さもなければ、わしのこの鉄の杖が承知しないぞ！」

竜王は鉄拐李の言葉を聞くと「お前は何者だ！？このビッコ奴、竜王であるわしと話し合える立場だと思っているのか！？」

と言い返しました。

鉄拐李はいっそう怒って、手に持っている杖をびゅんびゅん振り回すと、龍宮は地震のようにゆらゆらと今にも倒れそうになりました。呂洞賓は鉄拐李に「無礼なことはやめなさい！」と窘め、また竜王に向うと再度重ねて頼みました。

「竜王様、我々の仲間が何か悪いことをしたのであれば、どうかお許し下さい。藍采和と拍子木さえ戻してくだされば、これからは絶対竜王様のご領内に踏み込まないと誓います！」

しかし竜王は依然として傲慢な口調で

「わしは何も知らないと言ってるであろう！わしは忙しいのだ。さっさと帰っていけ！」

と答えました。

鉄拐李は竜王の無道ぶりにもうどうしても我慢できず、杖を再び大きく振り回すと、海の水は盛り上がり高い波を打ちはじめました。この頃には、他の仙人たちもこれ以上辛抱できない気持ちになっており、海上に荒々しく盛り上がる高い波を見て、きっと海の下で何かが起こっているに違いないと皆で龍宮に向うことにしました。

竜宮へ打ち揃って向ってくる仙人たちを見た竜王は、仙人たちに負けないよう兄弟達、息子達を集めると、総力を挙げて対戦する体勢を整えました。この様子を見て仙



人達も、竜王軍との戦いはもう避けられないと覚悟して、各自の自慢の宝物を取り出して応戦し始めました。

まずは呂洞賓が剣を駆使して、龍宮の宮殿を幾つにも切り割り、鉄拐李が瓢箪から火を噴き出させると、龍宮は瞬く間に一面の火の海になって燃え上がりました。一方、竜王も竜王の宝物である「避火神珠」を駆使して火を鎮めました。このようにして双方入り乱れての、力互角の混戦状態が果てしなく続きましたが勝負はつかず、東海は泡立って高く黒い波が立ち、海の上空は真っ黒い雲で覆われました。

折も折り、布教の道中にあった観音様が、東海を通りかかりました。あわ立つ不穏な海の様子を見て、海底ではきっと何かが起こっているに違いないと考えて尋ねました。

「海の中で誰がこんなに騒いでいるの？」

戦いに夢中になっていた八仙も竜王も、突然の観音様の声にびっくりして、暫し喧嘩を止めると海面に浮かび上

がり、神妙に挨拶を送りました。

「お騒がせして、すみません。」

「お前達なのか。なんでこんなに騒がしいのか？」

「八仙人がわしの龍宮を焼いてしまいましたのです」

「そうではない。竜王が先に我々の仲間を連れ去り宝物を自分のものにしてしまったのだ」

「いや、八仙らがわしの領分に侵入したのが先だ」

と、各方とも自分の言い分を主張しました。

観音様が八仙たちと竜王のそれぞれが口々に言うのを事細かく聞いた上で双方を説得し調停しました。そしてその結果、八仙達は龍宮を元の姿に戻すことにし、竜王は部下に命じて藍采和を解き放させ、自身も藍采和に拍子木を返しました。

全てのことが目出度く終わった後、八仙達は観音様にお礼の言葉と別れを告げ、それぞれ自分の宝物を持って、波を踏み東海を離れました。

(終わり)

土の香りのモダンアートXVI

兎の山

日本農民画協会 平野 理絵
<http://nouminga.web.fc2.com/>

新年好！ 2011年は卯年。

日本ではウサギはその高い跳躍力から出世や目標達成のシンボルとされています。中国でも同じように縁起の良い動物として古来から工芸品の文様に好んで用いられていました。

漢代には翼のあるウサギが瓦などに描かれていたようで、麒麟などと同様にめでたいしとされる霊獣のひとつとして考えられていたようです。

さて、ウサギをモチーフにした農民画といえば、この「兎の山」が私はまず頭に浮かびます。パッチワークのように継ぎはいだ感じの山々を背景に、濃いルビー色のつぶらな瞳のウサギ達があちこち自由に駆け回っています。よく見ると葉っぱをモグモグ食んでいる様子が描かれています。あの小学校の飼育小屋でキャベツを食べていたウサギの鼻と口のあたりの可愛らしい動きが思い出されてとっても癒されます。

全く遠近感を無視した描法がウサギの愛らしい姿かたちを際立たせた作品ですね。

食卓の上いっぱい置かれた食材やごちそうの絵を見ると、とても豊かな幸せな気分になりますが、こんな風に彼らにとってのごちそうがいっぱい生なった山を自由に駆け回るハッピーな面持ちのウサギの絵を見ると、や



「兎の山」 朱 素珍 上海・金山農民画院

はり気持ちさがほっこりと微笑みます。

農民画は、生活の中の祈りや願いを、こうであったらいいな、という気持ちのままに描かれていますが、それは思い通りにならない現実を強く生きぬく知恵でもあると思います。現代の私達もその知恵にあやかることが必要かもしれませんね。今年もファンタジーの力を借りて幸せになりましょう。

四姑娘山麓の長坪村は2008年5月の大地震で大きな被害を受けた時に'わんりい'の皆様を始めとする多くの方々から電気毛布等の援助を頂きました。ここに改めて御礼申し上げます。

その後この長坪村に政府は多額の援助資金を投入して復興を急いでいましたが、今年(2010)11月までにほぼ工事を終えて見違えるように綺麗な観光を志向した家並みの集落を作りあげました。そして12月3日には完成のお祝いも行われました。

日本のNPO等から援助資金を受けた新しい村の診療所も実現しました。この診療所は当初村が自力で建てる計画でしたが、色々な協議を経て政府が建築資金を全額拠出して建てた村の総合庁舎の中に規模を縮小して収まる事になりました。そのため診療所は診察室とベッドルームの2部屋だけに縮小されました。政府は町に改築して建てた合同の日隆救急医院・日隆鎮衛生院を主として、村の診療所を補助手段にする意向です。

現在、診療所に薬やベッド等の医療機材の一部が搬入され開所していますが、医者は日隆鎮衛生院から週に一日来ているだけです。村長の話に拠りますと、今年夏に赴任予定していた医者の養成に手間取っていて赴任は来年(2011)夏に延期されるそうです。今後更に酸素吸入器や高額な薬等も揃えて、登山客にも高山病等への応急医療サービスを提供する事になっています。

診療所の建築資金を政府が全額拠出したため、日本

のNPOが寄贈した約3万元は酸素吸入器や薬やベッド等の医療設備を整える資金として使われ、アメリカの基金が寄贈した6万元余りは返却する事になりました(アメリカの基金は他の困っている場所へ廻す意向です)。

急激な経済発展と豊富な地震復興資金を背景にした状況の変化は、外国からの善意の援助の在り方に大きな影響を及ぼしています。前述のアメリカの基金のトップも、この状況変化が地震に関係ない地域でも生じていて援助活動に大きな変化をもたらしていると言っています。



写真2 村の総合庁舎：観光開発を意識した3階建て約240m²の作りで、中に村役場や公安派出所や旅行案内所や診療所等が有ります。

下の写真は、地震発生直後の【写真2】と同じ場所です。テントを張ってある広場が整備され、12月3日の町並み完成のお祭会場になりました。両者を並べてみると日隆の街の変貌振りがよく分かるかと思ひます。

↓2008年5月、四川大地震直後の上の写真と同じ場所の様子

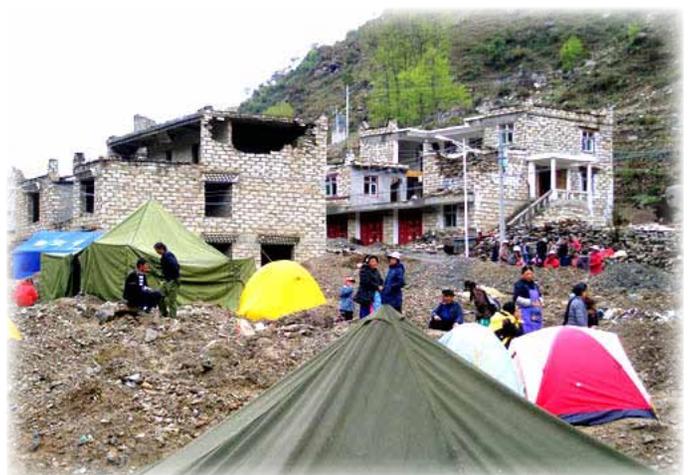


写真1 新しい集落の表通り：成都の建築事務所がチベット風に設計した家並みで、10年前には考えられなかった様相です。家の建築にも外装にも多くの政府資金が投入され、村人は大喜びしています。



写真3 12月3日、民族衣装の晴れ着を着て、新しい町並み完成のお祝い会場向う人たちが賑わう表通り



写真4 完成のお祝い：広場での踊り



写真6 診療室：薬棚や寝台が置かれたベッドルーム。



乡村医疗站

写真5 実現した村の診療所「乡村医疗站」の表札の下で喜ぶ村長

右は、二〇〇七年にユネスコ世界自然遺産として登録された、中国四川省ジャイアント・パンダ保護区一帯で、現地の保護活動をしている大川健三氏（四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問）から、「わんりい」の皆様へのお年賀状です。



中国陝北の人々は新年(実際は旧正月)を祝って、家をたくさん剪紙(切り紙)で飾ります。剪紙は下手な私ですが、今回は新春にちなんで、剪紙代わりにいくつかの切り紙を集めて並べてみたいと思います。

こんなことを思いついたのは、先日たまたま手にした、イタリアの美術家ブルーノ・ムナーリの本、『円形』・『三角形』・『正方形』に触発されたから。これは、○△□をテーマに、古今東西、建築や民俗風習から現代美術、子どもの遊びから物理学や天文学まで、ありとあらゆるモノや事象を並べて、そのカタチの神秘を明かそうとした図鑑のような書物。

○△□の穴にはまった百を優に超える事物を、特定のカテゴリー分けせずに、アルファベット順に並べたこの本は、頁を繰るごとに、むしろ自由なイメージが広がっていくような快感を与えてくれました。そう、子供の時に開いた百科事典が、ある項目から隣の項目へと意図せずして目移り、次々と世界が広がってつながっていくような、あの感覚です。

そもそも、“紙をあるかたちに切り出す”という単純な営みは、それ以上でもそれ以下でもないはかないモノであるからこそ、身近にあって力を発揮するのかもしれない。中国で切り紙する人々と触れ合う中で、私はそんなふうになるようになりました。紙が貴重であった古代から、人はさまざまな思いを“切り紙”に託してきたと見え、五千年前の新疆の遺跡からも宗教儀礼用の切り紙らしきものが出土しています。薄くて軽く、長く垂らして、揺れて、簡単に切り刻むことができ、あっという間に燃えて消え去る「紙」。いつもの中国陝北地域の剪紙からちょっと目線をそらして、他の様々な切り紙を眺めると、その根源的な働きとそれをめぐる人々の関係の多様なあり様が見えてくる気がします。

この試みを題して、切り紙の「私的十科事典」。本当は百科事典といきたいところですが、まずは十個から始めてみます。他にも、伊勢型紙や七夕飾り、世界各地に散らばる多彩な切り紙文化等々、入れたい項目はたくさんあります。「こんな切り紙もあるよ」と思いつかれた方は、ぜひお知らせください。

以下、適当なあいうえお順から、何か面白いものが見えてくるといいのですが……。

 **アンデルセンの切り絵(デンマーク)**

童話作家のアンデルセン(1805～1875)は、切り絵の名手としても知られる。彼が切った作品は数百とも数千ともいわれるが、現存するのはたったの250枚。多くがこの世に残らなかったのは、それらの切り絵が子供たちに



プレゼントされたり、本のしおりにされたから。

「アンデルセンは私たちにおとぎ話をしながら、紙きれを折り畳んで鉄をくねくねと走らせるの。紙を開くと、そこにはカタチがあった」と、後に多くの子どもたちがその幸福な体験を語っている。

白鳥をはじめとする様々な動植物、ピエロやバレリーナ、悪魔や天使、人魚や魔女、お城やアラブのモスク……、アンデルセンは白い紙や新聞紙や楽譜など身の回りの紙を使って、下画も書かずに自由自在に見たものや想像上のモチーフを切り出した。

多くの人々がカメラを手にし得なかったこの時代、生涯を旅に生きたこの作家にとって、即興的にカタチを繰ることが出来る切り絵は、ときに記憶を写し取る道具となり、また言葉が通じない人と心を通じ合わせるための小粋なメディアにもなった。しばしばチップ代わりにもなったという。彼が旅先で子どもに切り絵をプレゼントしたところ、そのあまりの出来栄にお祖母さんが横取りし、孫が大泣きしたといったエピソードも、自伝に伝えられている。

[参考] 図版：Beth Wagner Brust, The Amazing Paper Cuttings of Hans Christian Andersen, 2003]

 **江戸の紋切り遊び(日本)**

今では「決まりきったツマラナイもの」といった意味で使われる「紋切り型」という語。その語源は文字通り紋を切り抜くための型であり、江戸時代、人々は家紋を紙に切り出す遊びに興じていたという。紙を数回折り畳んで型紙通りに鉄をいれ、紙を開くと、美しいカタチが現れる、これが「紋切り遊び」だ。はじめは紋を描く職人の型紙制作の技術として発展したものが、町人たちの間にも広まり、教本も売りだされて、寺子屋や遊郭で嗜まれた。

家紋は長い間、貴族や武士階級のものであり、身分を見分けるしるしとされたが、町人が力を蓄えた江戸後期には、役者が舞台で使いはじめ、町人も家紋を身につけ



江戸時代の紋切り遊びの指南書



南天をかたどった家紋。難を転ずるという意味が重ねあわされた。

るようになった。新たな紋が生み出されては流行し、着物をはじめ様々な意匠に応用されたのもこの頃だ。言葉遊びとも結びつき、生きながらえたカタチは、まさに日本のグッドデザイン。そこからは、自分の数世代前の人々のしゃれっ気たっぷりの感性や、季節の自然や日常の道具などを愛でる瑞々しい視線を伺い知ることが出来る。紋切り遊びに連なる切り紙は、明治以後も昭和初期くらいまでは「キリヌキ」という名で図工の教科書に登場していたというから驚きだ。

[参考] 図版：下中菜穂『切り紙・切り抜き・紋きりあそび』、2009年]

きりこ・切り飾り(日本)

地方によって「きりこ」や「彫り物」など様々な名称で呼ばれる正月飾りや神楽などの切り紙細工。今でも神の依り代や神仏に捧げる御幣、吉祥柄の縁起物として、全国でその土地の風土に合った多くのかたちが作られている。作り方には大きく分けて、和紙に図柄を切り透かした平面的な切り紙と、和紙を折って複雑な切りこみを入れた立体的な切り紙があるという。



各地の花祭では意匠に富んだ切り飾りが作られるが、

たとえば岡山の備中神楽の演目では、木杵からたくさんの細長い御幣を垂らて天井から吊るし、精霊が飛んでいるように上下にゆらゆらと動かすそう。神の降臨を紙が揺れる優雅な動きで視覚化するドラマチックな仕掛けだ。

今では白一色で作られることが多い切り飾りだが、五行を象徴する五色で作る場所もあり、特に古い神楽ではかたちのなかにも神道・陰陽道・道教・修験道といった多様な信仰の混在が見られるという。

[参考] 三上敏視『神楽と出会う本』、2009年]

上海美術映画製作所の剪紙アニメ(中国)

上海美術映画製作所(上海美術電影制片廠)が、60～80年代にかけて製作したアニメーション映画は、水墨画、セル画、人形、そして剪紙(切り紙)といった民間芸術の伝統を取り入れ、その高い技術と独特の柔らかな風合いが、世界中の人々を魅了した。



なかでも1981年公開の『猿と満月』は、台詞がない影絵芝居のような美しい剪紙アニメ。軽妙な

BGMとともに、猿の群れが、空にのぼったまん丸お月さまをどうにか掴み取ろうと悪戦苦闘するコミカルな世界が描き出される。木々の剪紙を幾重にも重ねて黒い影のみで描き出される野山の中を、起毛してふわふわした質感の紙から切り出された、色とりどりの剪紙の猿たちが駆け回る、その表情や動きがなんとも愛らしい。

[参考] 図版：『上海アニメーションの奇跡』映画祭パンフレット、2010年]

葬礼や祖先崇拝・厄除け儀礼の紙モノ(中国・日本)

中華圏の葬儀や墓参りで、冥界の祖先に贈るたくさんの紙銭や豪華な日用品を模した紙細工が燃やされることはよく知られる。



陝北の厄除けで使う「丹曉」

陝北農村では葬儀中、村の長老女性たちが死者の遺体の傍らで、白い紙を丸く切り取り、中央に穴をあけただけの紙銭を作る光景が今も見られる。この他、この地域では出棺時、たくさんの切り紙細工をほどきた長い紙を垂らし、上に紙で形づくった鶴を載せた「引魂幡」と呼ばれる旗幡が墓への列を先導する。



日本の神社のヒトガタ

この時、女たちは大声で泣きながら、沿道に手作りの紙銭をばらまきながら参列する。

これは近寄ってくる無縁仏の霊や悪霊を鎮めるためだとも言われる。これらの儀礼で使われる紙モノの多くは、「焼化」、つまり燃やされて消えることで、あの世に届

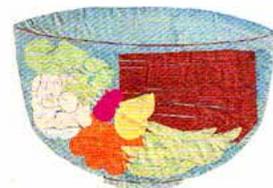
き、目的の働きをしてくれると考えられる。

厄除けや病送りの祈祷に使われる紙製のヒトガタ(人形)もまた、焼かれることを旨とする紙モノだ。陝北の招魂儀礼では、蛇腹折りにした黄色い紙に子どもの姿かたちを切り出して、病人の身体をその紙で撫でて病を移し、燃やしてあの世に送ると同時に、抜け出た病人の魂を元の身体に呼び寄せる。日本でも、紙のヒトガタに自分の名前を記して息を吹きかけ、穢れを移して、神社に納めたり、川に流して無病息災を祈る風習が各地にみられる。

智恵子の紙絵(日本)

「千数百枚に及ぶこれらの切紙絵はすべて智恵子の詩であり、抒情であり、機智であり、生活記録であり、この世への愛の表明である。」

詩人高村光太郎は妻、智恵



子の切り紙にこう賛辞を贈った。油彩画で壁に突きあたり、精神を蝕まれた智恵子さんは病床で、夫が差し入れる千代紙に爪用の小さな鋏を入れて、身の回りのものを題材に紙絵を作り始める。

光太郎の回想によれば、彼女は食膳が出ると皿の上のものを紙で作らないうちは箸をとらず、看護婦さんを困らせたという。最期の日、紙絵をひとまとめに整理したものを夫に手渡し、安心したように微笑むと、智恵子さんは静かにこの世を去った。

【参考】 図版：高村智恵子『智恵子の紙絵』、1965年

✂️ パペルピカド(メキシコ)

メキシコではpapelpicado(パペルピカド)と呼ばれる切り絵が盛んで、祭のときに万国旗のように連ねて吊り下げられ、街を色とりどりに彩る。独立記念の



時はメキシコ国旗の色、赤、緑、白のもの、死者の日にはガイコツ、結婚式にはハートやケーキが切り抜かれた物等、様々なパペルピカドが飾られるらしい。薄い型紙の下にパペルチーナと呼ばれるクレープペーパーやビニールを重ね、ノミのような刃物で切り出して作られるとか。(目下、調査中。情報ある方はご一報ください!)

薄型紙の下にパペルチーナと呼ばれるクレープペーパーやビニールを重ね、ノミのような刃物で切り出して作られるとか。(目下、調査中。情報ある方はご一報ください!)

✂️ プロパガンダ剪紙(中国)

文字を解さない農民が圧倒的多数であったかつての中国農村において、春節やハレの日に家の内外に貼られる



剪紙は、古くは抗日戦争期から、人々へ政治的メッセージを運ぶメディアとして広く流用されてきた。1930年代、延安を拠点にした革命美術家たちは農村で窓花を収集し、その様式を模して剪紙風の木版画「木刻剪紙」を制作、街角に展示したり市で販売したところ、型紙として飛ぶように売れたという。

この時モチーフとされたのは勇ましい紅軍の兵士や字を学習したり共に労働する農民たちの姿であったが、この手法は、文革期にもそのまま用いられ、紅衛兵や毛沢東、理想とされた「新農村」の光景を写した剪紙の型紙を並べたポスターが、当時村々に配布された。

これらのプロパガンダ剪紙や版画は農村の風習や生活環境に巧みに取りこまれ暮らしの中に入り込み、さらに農民たちの手で複製され、広まっていったとされる。

✂️ マティスの切り紙絵(フランス)

「鋏は鉛筆や木炭以上に線描の感覚をものにすることができます」

画家アンリ・マティス(1869～1954)は70歳を過ぎた晩年になって、「切り紙絵」に行きついた。この技法はこの



画家に、「はさみでデッサンする」という制作と表現方法の革新をもたらしたと言われる。

マティスは、通常の絵画製作につきものの「線と色」「図と

〈サーカス〉(画集『ジャズ』1874年)

地」といった境界を曖昧にして、「色彩と同時に形を作り出せる」ということに、切り紙絵の可能性を見い出していった。

当時、マティスのアトリエには壁いっぱい切り紙絵が貼り出され、それはまるで判じ絵を見るような喜びを与えてくれたという。紙と鋏と手のセッションによって、ある種のルールや制約を受けつつも即興的な自由度の高い制作を実現するこの技法を、マティスは音楽のジャズに比して、自身の切り紙絵画集のタイトルとした。

【参考】 アンリ・マティス『画家のノート』、1978年

✂️ 寄席の紙切り芸

「落語にもウソがあるように、紙切りにもウソがある。」稀代の紙切り芸人と言われた、故二代目紙切り林家正楽が弟子に語ったというこの言葉は、パフォーマンスとしての切り紙の醍醐味を言い得て妙だ。

寄席の色物の一つである「紙切り」は、縁起物や芝居の場面など古典的なものから、客の要望に応じて流行りのアニメ・キャラクターやアイドルに至るまで、様々な題材を白い紙から切り出していく伝統芸。明治初めに、一人の幫間(男芸者)が江戸時代の座敷芸を寄席の芸に仕立てたのが最初だとされる。人気に火がついたのは戦後、テレビ番組で初代紙切り林家正楽や二代目が活躍してから。二人はともに、落語家を目指して入門したが、強い訛りに苦しんだ末、紙切りに活路を見出したという。

“これが本当のカミ技です”を口癖に、ユーモアたっぷりに見事な紙切り芸を披露した二代目正楽は言う。「きれいに、上手に切るのが紙切りじゃない。スピーディに切って、切ってる間もお客さんを楽しませる、それが紙切りだ。」

【参考】 桂小南治・林家二楽『父ちゃんは二代目紙切り正楽』、2000年

◆丹羽朋子(にわたもこ)——
東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。一芯社ウェブサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)から、本エッセーのバックナンバーもダウンロード可能になりました。

先日、テレビでこんな場面があった。このところの日本外交について、評論家たちが「戦略がなさすぎる」という批判を口々に言うなかで、爆笑問題の太田光が「でも、もしかしたら、そんな日本の外交が進んでいる姿かもしれない」という趣旨の発言で、場の空気を変えていた。

裏表のない外交を理想とするならば、の話だ。彼が本当に日本外交を「進んでいる」と思っているのかどうかは分からない。ただ、ひとつの意見がその場を凌駕しようとしているのを、水をさっとかけて止めようとしたのだと思う。既成概念をひっくり返したところに、笑いやユーモアが生まれるとしたら、お笑い芸人として彼は、ひとつの意見が「既成概念」となることに気持悪さを覚えるのかもしれない。

本書の「憲法九条を世界遺産に」というタイトルは、太田氏の独特の言い回しで、憲法九条という特異性や現実との齟齬を受け入れた上で、「下手をすれば殺される」「下手をすれば、相手を殺す」というところまで覚悟して守るべきだという主張だ。



そもそも、憲法九条は、太田氏の言葉を借りると「日本人の、十五年も続いた戦争に嫌気がさしているピークの感情と、この国を二度と戦争を起こさせない国にしようというアメリカの思惑が重なった瞬間に、ぽっとできた」。つまり「あの血塗られた時代に人類が行った一つの奇蹟」だという。「いまこの時点では絵空事ごとかもしれない」、戦争をしない・軍隊も持たないというこの条文は「人間の限界を超える挑戦」だと太田氏は言い切っている。

さて、昨今、朝鮮半島のニュースを目にすることが多く、留学した友達が言っていたことを思い出した。「韓国は徴兵制があるから、政治の話が他人事にならない。ちょっとした政治の動きで、自分が戦争に行くかもしれないという緊張感があるから」。一方で、戦争も軍隊も放棄した私たち。「私たち日本人は、人間の限界を超える挑戦をしている」という思いで、政治情勢を見ているだろうか。覚悟の上での憲法九条なら世界に誇れるが、ちょっとおぼつかない。だからこそ、世界遺産登録なんだろうな。
(真中智子)

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

山茶花の零るる辺り薄明り

shān cháhuā yān hóng
山茶花嫣红

piànpiàn huābàn fēn diāolíng
片片花瓣纷凋零

zhōuzāo xiǎn wēi míng
周遭显微明



福寿草狭庭の日射し独り占め

yōuyōu xiǎo tíngyuán
幽幽小庭园

cè jīnzhānhuā huáng càn càn
侧金盏花黄灿灿

yángguāng dú xiǎng zhàn
阳光独享占

季语：山茶花，冬。

赏析：我国宋代诗人秦观在《春日》中吟道：“有情芍药含春泪，无力蔷薇卧晓枝。”是说蔷薇在黑夜的风雨中挣扎后，清晨已经疲惫得无力坐起了。松本女士的这首俳句与秦观的《春日》有相通之处，叙述的都是清晨观花，只是这山茶花比蔷薇受的摧残更甚，花瓣已经凋零了。本首俳句情景交融，风格婉丽，笔触细腻，色彩凄艳。

季语：侧金盏花，冬（也有作为新年的）。系毛茛科多年生草本植物。高十至三十厘米，早春开黄花。栽培的园艺品种众多，大都作元旦的观赏花而盆栽，利用谐音而求吉利。

赏析：狭小的庭院阳光本来就少，而作者则要让侧金盏花尽情享受阳光的温暖，使其以最美的姿容装扮新年。虽然本句貌似平铺直叙，但作者年末繁忙而喜悦的心情却跃然纸上，充满了明快欢乐的气氛。

中国では外国語を学んでいる若者は大変多いです。英語を学ぶ人が一番多いですが、日本語は英語に次いで二番目の学習人口を有しています。外国語を学習している人数は英語、日本語、フランス語、ドイツ語、韓国語の順とのレポートを新聞で読んだことがあります。

福建省福州市の前に私が教えていた大連市のある、遼寧省では英語よりも日本語を学ぶ人が多く、特に大連ではテレビでも日本語番組があり、タクシーに乗っても日本語を話す運転手がいたほどです。しかし、福州では日本語は日本料理店や日本語科のある大学で耳にする程度で、テレビでの日本語番組はありませんし、ましてやタクシーの運転手が日本語を話す等というのは皆無でしょう。

福州にいた時はNHK国際放送をテレビで見ることができなかったので、その代わりに毎晩英語番組を見ていました。中国には中央電視台(CCTV)の英語専門の放送番組があり、24時間見ることができます。よく見ていたのはニュース番組とトーク番組です。ニュース番組では普通の中国語のニュースで聞いていてもよくわからないものが英語のニュースを聞けば、よくわかるといった次第でした。トーク番組はほぼ毎晩あり、あるテーマをもとに中国人のニュースキャスターを司会者に、外国人(または中国人の場合もありました)のゲストを迎えて、1時間討論するという番組です。こ

の番組は大変役に立ちました。

中国人の英語力がどんなものかといえば、日本人よりは数段勝っていると思います。今アメリカに留学している中国人の数は20万人を越え、日本人よりも10倍以上にもなっています。彼らの英語力は素晴らしいです。私が教えていた大学でも英語を話す学生は多く、同世代の日本人学生より上手です。彼らは自分の意見をはっきり表現することができ、物おじしませんが、中国全土で今大変流行している英語学習方法には中国人が提唱したCRAZY ENGLISHというものがあります。1週間ほどの英語合宿で徹底的に鍛えて、話せるようにするというものです。映画にもなりました。雑誌等でも出ていて、評判になっています。

街を歩いていると、よく英語で書かれた看板や表示を目にします。ところが、その英語というと非常におかしなものや吹き出しそうなもの、首を傾げたくなるようなものが大変多くあります。若者たちの素晴らしい英語力と比べると、日常生活で目にする英語はどうもおかしいのです。あまりにも両者のギャップが大きいので、どちらが本当の中国人の英語なのか分からなくなってきそうです。

本文に掲載した写真は、街中で目にした、いくつかの例です。皆さんの感想は如何ですか。

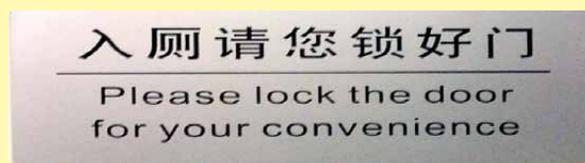
(次号に続く)



①飛行機の中で出されたランチボックスに書かれていた英語(WE HONOR OUR CUSTOMER WITH RESPECT BASED ON SINCERITY)。これは「当社はお客様を心から尊敬いたします」という意味だが、ランチボックスの内容は小さなサンドイッチとミネラルウォーターだけで、その皮肉っぽさが笑えません。



②駅前の案内用掲示板に書かれた'Taxi Waition Area'は、'タクシー乗り場'の意らしい。しかし、WaitionはWaitingですね。Waitionと言う英語はありません。普通はTAXI STANDでしょうか。



③トイレの中にあった注意喚起の為の表示で、直訳すれば、「あなたの便宜のためにドアには鍵を掛けてください」というような意味です。確かに、中国人は鍵を掛けない人も多いようです。でも、中国人は漢字の方を読むでしょうし、中国人以外は皆鍵を掛けるのでは？

「ママ・オザヤ」尊敬を込めてそう呼ばれる人がいる。

ケニアでは、結婚した女性は子供を持つと長男の名前を付けて呼ばれる。例えば私の場合は、長男の穰(じょう)の名前を取って、「Mama Joe(じょうのお母さん)」とケニアでは呼ばれる。日本でもご近所さん同士では、「～の奥さん、～のお母さん」と呼び合う習慣があるがそれに似ている。ただケニアでは、村中、国中の人からそう呼ばれるところが違う。

しかし、私が中央ケニアニエリ県にあるothaya(オザヤ)村を訪ねたとき、「ママ・オザヤ」と地名で自己紹介するおばさんがいた。私の夫は、彼女を「お母さん」と呼び、彼女は私の夫を「boy(ボーイ)」と呼んでいた。夫の親戚なのか、近所の人なのか分からないまま私はこの村のこのおばさんの家に数日間滞在した。Othaya村は、夫の母の実家があるところであり、挨拶をかねての初訪問であった。

朝、おばさんと一緒に水汲みに出かけ、薪をくべて紅茶の準備をする。その間にヤギのミルクを絞っておく。ウサギや鶏にえさをあげ、家の掃除。朝ごはんはチャパティというパンを焼いてくれた。その後畑に出かけ、農作業。お昼には、ギゼリという豆料理を作るために、豆ととうもろこしを2時間ほど煮る。それにしても、おばさん自身の家族が見当たらない。でも用意したお昼ご飯は、どうみても30人前くらいの量だ。

「お昼ご飯は、人が沢山くるのですか？」と私が訊くと、「子供が沢山学校から帰ってくるからね」と言った。暫くすると、幼稚園生、小学生、高校生、大人までいろんな年代の人が次々におばさんの家に集まってきて、昼食を食べる。おかわりをし、おしゃべりをし、それぞれに楽しい時間を過ごす。おばさんの家は、とても狭い。10人くらいが入れ替わりながらお昼ご飯を食べていく。その日だけで、35人くらいの人 came。

すべての人が帰り、食器を洗いながら叔母さんは言う。

「みんな私の子供じゃないのよ」

「私は結婚もしてないし、子供も生んだことはないのよ」

「私の名前を聞いて、想像できなかった？」と聞いてきた。

結婚しなかったおばさんは、自分の父親から地名(othaya)を与えられ、mama othaya(ママ・オザヤ)と呼ばれるようになったそう。そして、「私は子供を生めない身体を神様から授かったのね。ケニアの農村では、そういう女性と結婚する男性は当たり前だけじゃないでしょ。でもね、私は商売が得意だったから、小さなビジネスをしているのよ。その傍らで、農作業で忙しいお母さんたちの代わりに子育てをしているのよ。本当にもうたくさんの子供を育ててきたわよ。貴方の旦那も私が小さい頃はすーと育てていたから、彼は今でも私のことをママとよんでいるでしょ？ たぶん村で一番私が子育て上手」と笑った。

ママ・オザヤに子供を育ててもらった家族の数は本当に

数え切れないという。その誰もが、そんなおばさんのことを尊敬し、愛し、信頼している。おばさんは「自分の子供を生まなかったからこそ、たくさんの子育てが出来た」と言う。そしてそれが自分の運命だとも。他人の子供の子育てにかかる費用も自分の仕事で得た稼ぎでやってきたと言う。

今、おばさんが育てた子供は大きくなって、成人した後もおばさんへの感謝を忘れない。夫もケニアに帰ると、必ずおばさんの家で泊まる。そしておばさんへの心ばかりの援助をする。お金や衣類や食べ物を適宜、おばさんは育てた子供達からもらっている。最近仕事を減らしているおばさんは、育てた子どもたちの援助で、今も育てた子供たちの子供たちの面倒をみていたりしている。

実は私が泊まった夜、ちょっとした事件が起きた。みんな寝静まった後、私が1人で寝ていた部屋のドアを乱暴に叩く音がした。それは何度も続き、私は怖くてひたすら音が止むのを待っていた。次の朝、おばさんにその報告すると、次の日は同じ部屋で寝てくれた。また前夜のようにドアを叩く音がした。その音を聞くや否やおばさんは、とび起きて、床に置いていたパンガ(ケニアでよく使われている農作業用のなた)をつかんでドアを開けた。犯人は逃げた。誰かは未だに分からない。外国人を泊めるのは、ケニアでは危険なことなのだろう。私の金品を狙おうとした人がいてもおかしくは無い。そんな危険なことも承知で、自分が育てた子供が連れてきたお嫁さんを泊めて、危険があれば、武器を持って守る。

私財を投げて、時に危険を冒して、人の子供を育て続ける。そんなおばさんの唯一の趣味が「タバコ」だ。すべての仕事が終わった一日の終わりに、イスに座って静かにタバコを嗜む。女性がタバコを吸うことはケニアでは非常に珍しいことだ。

「タバコ、おいしいですか？」と私が聞くと、それには答えず、「私の育てたBOYは、とても自慢の息子だよ。よろしくね」と笑ってくれた。

ケニアでは、結婚してもしなくても、女性が子供を生むことはごく当たり前のことだ。

子どもを生むとか生まないとかを自分の意思で「選択」したり「決断」したりできるようになる迄にはケニア女性は今後もまだまだ自分達の権利として主張していかないといけないかもしれない。そんなケニアでおばさんが辿ってきた道は私の想像をはるかに超えた難しいものだったかもしれない。

しかし、これまでの苦勞を感じさせない笑顔で接してくれるおばさんと暮らしてみると、これまでのそんな苦勞はたいしたことはないような気がしてくる。

—「すべては神が決めたこと」—

幾度となく聞いた、ママ・オザヤの口癖だ。

今回は済南市(ジーンンと読む)である。山東省の省都であるが、日本人には余りなじみが無い都市かも知れない。人口は大連市と同じくらいの600万人。しかし面積は、大連市の60%程度である。済南市は黄河(昔は済水と言った)の南にあることから済南と言う名前がついた。ちなみに遼寧省の省都の瀋陽市は渾河という大河の北に位置する。渾河は昔は瀋水と呼ばれ、水の北側は「陽」南側は「陰」とする風水の考えを取り入れ、瀋陽という名前となった。済南も済陰でもよさそうだが済南となった。

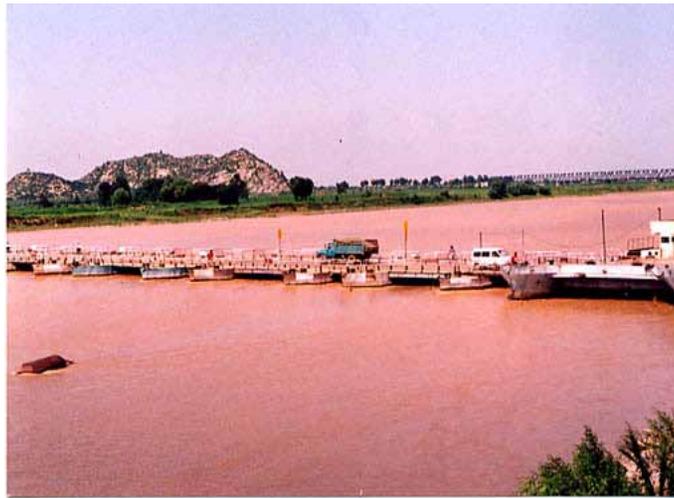
さて済南は、北に黄河、南に泰山というところに位置する古都であり水の都でもある。これについてはのちほどふれる。泰山の南には曲阜という街があるが、ここが孔子の生まれ故郷である。前回の「大連市」のところで書いた「一山一川一聖人」である。

まず黄河についてふれてみよう。黄河は長江とともに世界的な大河であることはご承知の通りである。長さは5464kmであり中国では長江について長い。日本の最長の河川である信濃川でも367kmしかない。いかに長いかということである。その源は遠く青海省に発する。今年4月14日に発生し、約3千人もの死者・行方不明者を出した青海大地震の震源に近いところである。黄河の水は黄土高原を經由していくため黄色であることはテレビなどで見てはいたが、実際この目で見てみたいと思いたくシーに乗って見に行った。市の中心部から20分くらい乗ると、有名な浮橋についた。これは字の如く橋ゲタのある通常の橋とちがい、タンクのようなものをつなげて渡れるようにしてあるのだ。そこには滔滔と流れる黄色い濁流があった。かなりの迫力であり「これが黄河か」と納得した。見ていると土地の人と思われる人が来て「絵ハガキを買わないか」と言うので三・四枚買った。夕陽に映える黄河の絵葉書はとても美しく、この河はいろいろな顔を見せるのだと思った。

次は泰山である。私は以前からこの山が特に好きで、一度登ってみたいと思っていた。私のメールアドレスを「t_taizan…」としたのもこの山が好きだからである。今は解散したが、漢詩の会に所属していた時、先生からつけてもらった名前は「泰堂」でこの名前も気に入っている。なにしろ泰山の泰の字が入っているからだ。この山はふもとから頂上まで何千段という石段が続いているが、

登ってはみたいが体力に自信がないのとちょっとした旅行で来ているのでゆっくり登る時間もなかったのでロープウェイを利用した。この山の高さは1545mで山東省では最高峰であるが、チョモランマ(=エベレスト山)をもつ中国ではたいした高さではない。しかしこの山は昔の皇帝が皇帝の正当性を示すための「封禪の儀式」を行った名山中の名山である。中国史上72人の皇帝がこの儀式を行っているのである。また孔子や杜甫など多くの名だたる人が登っているいろいろな言葉を残している。孔子は

「登泰山而小天下」(泰山に登ると天下と言うものは何と小さいことよ)という言葉を残している。山頂付近は大小の寺院が軒をつらねるように立っており、よくこんな頂上につくったものだと感心する。今ならヘリコプターで資材をあげてつくと簡単かもしれないが、文明の利器が何もない時代である。中国人の底知れぬ力を充分感じさせるものである。この



済南市・黄河「浮橋」

山の入り口には「第一山」の大きな石碑が立っていた。

最後は孔子について話してみたい。前述したように泰山の南に曲阜がある。曲阜とは「曲がっている豊かな丘」という意味と、ガイドブックにある。曲阜は、孔子に関する史跡のおかげで生活していると言っても過言ではない。ともかく町の人口の5分の1が「孔」という姓らしい。見どころは、孔廟と孔府と孔林である。孔廟は孔子を祀るために建てられた建築群であるがその中心をなすのは大成殿であり、中国の三大宮殿建築の1つである。孔廟について1つだけ付言すると、東京のお茶の水駅のすぐそばに湯島聖堂がある。孔子を祀ってあるのだが中に入るとうっそうとした木々の中に大きな孔子の石像がある。さらに進んでいくと目の前に大きな大成殿がここにもある。興味のある方は是非一度訪ねられたらと思う。孔府は孔子の嫡出子が代々暮らしてきた邸宅で、ここも何十という建物、何百という部屋がありこれを見るだけでも1日はかかると思われる。孔林は孔家歴代の墓所である。広大な森の中にいくすじかの道があり、すこし歩いて行くと孔子の墓の前に出た。よく見ると幅5cmくらいの鉄のベルトで割れた墓碑をくるようにしてある。聞くと文化大革命の時、紅衛兵がたおしてこわしたという。自分の権力維持のため物事の判断がよくできない紅衛兵を動かして、破壊させた毛沢東を私は全く評価しない。



済南市・趵突泉(しゃくとつせん)
池の中央の白い部分に水が湧き出ている

中国を旅行すると世界遺産の遺跡がなくなっていたり、こわれたり、よごされたりしている場所によくぶつかる。1つは紅衛兵によるものであり、もう1つは欧米諸国特に英・仏両国による破壊と泥棒である。この前もヨーロッパのオークションで北京の円明園にあった動物の銅像が出され、中国が返還するよう抗議したとの記事を見た。清の西太后の別荘ともいう立派だった庭園を尽く破壊し、そこにある文化財などを盗んで持ちかえたのは主にイギリスとフランスである。紳士の国とよく言われるが、私に言わせれば盗っ人の国である。以前イギリスに行ったとき大英博物館も見したが、世界中から盗んできたものを展示して平気な神経はいったいどういうことか！

いずれにしても孔子は紅衛兵に壊された自分の墓を天国から見て悲しんだに違いない。

「一山一川一聖人」について書けばキリがないのでこのあたりで筆をとめ、水の都である済南について紹介したい。

済南には、「済南72泉」といわれる泉が市内あちこちにある。水源は何処なのか知らないが、中でも有名な「趵突泉」は毎秒1600ℓの水が湧出しているという。私が訪れた日も泉水のほぼ中央部の水が大きく盛り上がりわき出していた。大きな池のようになっており周囲は、昔の建物が立ち並び柳が水面に影を落としている様は他の観光地に見られない情景である。泉水は透明でとてもきれいであった。これが近くにある大明湖という湖に流れ込む。この湖も有名で散策するのにとてもいい。

また「漱玉泉」や「国龍泉」も素晴らしい。日本も静岡県の三島市内に柿田川の湧水群が有名だが、済南のような大都市であちこちに泉がわき出る都市は世界でも余り類を見ないのでなかろうか。

漱玉泉といえば、この泉のそばに有名な女流詩人「李清照」(リ・チンチャオ)の記念堂がある。宋代の詩人だがこの地に生まれこの泉のそばで暮らしたという。ところが20才位の時北方の金という国が宋に攻め入り、彼女は夫とともに南方にのがれ、そのうち夫は亡くなった。失意の

うちに作った「詞」の多くが中国人の心を強く打っている。なお唐詩に対し宋の時代の詩のスタイルは「詞」といわれ一般に「唐詩宋词」と呼ばれている。

市内の南には千仏山という低い山がある。隋唐時代から多くの摩崖仏が彫られたためいつの日か千仏山といわれるようになった。ここも観光スポットである。ここに限らず中国全土いたるところにこのような場所がある。いくら人口が多いとはいえ私が中学生くらいの時中国の人口は4億人と学んだ記憶があるが、さすがに隋・唐時代は1億人もいなかったのではないか。全国にこれだけの仏像や寺院を作るにはやはり長い時間の流れが必要であったのだろう。

前述した泰山と曲阜は済南市ではないが、済南を旅する時はこの二つを組入れられることをおすすめし、済南市の稿を終えたい。

【'わんりい'活動報告】

第13回町田発国際ボランティア祭・夢広場 参加

例年、10月中旬から11月上旬のどこかで開催されていた「夢広場」だが、今年は時ならぬ台風の直撃が予報され、直前になって12月上旬5日(日)に延期された。

延期はされたものの季節的に寒くないか、雨は降らないか、強風は吹かないか、野外での催しなので心配し始めれば、気が揉める色々心配素材は限がない。しかし、当日は、夢広場の運営事務局長が、「延期してよかったあ!」と本音の挨拶が出るほどに、穏やかで暖かい小春日に恵まれ、出展15団体、ステージ参加9団体が集い、ステージに見入る一般客も例年より寛いでいるようだった。

‘わんりい’のブースはここ数年、遊牧民風味の炭火焼・焼鶏で参加していたが、今年初めて焼鶏に加えて、何媛媛さんにご指導頂いて作り始めた月餅を、会員の有為楠女士が一人で頑張って80個も作ってくださり並べてみた。お試し価格ということで1個150円という安価ながら、10種類以上のナッツをぎっしり詰めたナッツ餡とゴマと黒砂糖の風味を生かした小豆餡2種類で、瞬間に販売完了となった。

仮設舞台では、‘わんりい’お馴染みの永瀬さんの馬頭琴演奏や山下君のケーナの演奏、子どもたちの可愛らしい歌や踊り等などの他、今年はNHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」でも紹介された、国連UNHC協会事務局長の高嶋由美子氏の難民支援についての具体性のある話に真剣に耳を傾ける人の姿が見られた。

残念なことは定期的に期末試験とぶつかり高校生等のはつらつとした元気な姿が見られなかった。

(報告: 田井)



手作り月餅の売り行き好評

◆ 延川・夜の広場

西安でこの地方の地図を手に入れてから知ったことだが、黄土高原には家の名前のついた地名が多い。初めに泊まったヤオトンがあったのは白家塬だし、革命記念館は楊家溝だし、砦のように頑丈な家は姜家庄だし、延川の北の方には家の名前の着いた谷や高原が並んでいた。昔、中国では一人が科挙の試験に合格すると、一族が子々孫々安泰な生活を送れるほどの富と名声が得られたと聞か、地図上にある家族名は、そんな状況が関係しているのだろうか。

6時ごろに延川に帰着して、暫く休憩の後、ホテルの向かい側の、前日ちぎり麺を食べた食堂で、餃子を注文して夕食にした。正直な話、あまり美味しい餃子ではなかった。この地域は粉食文化が進んでいると聞か、この餃子は余りいただけなかった。地域の問題ではなく、この店だけの話かもしれないが、昨日ちぎり麺で楽しめたのに、今日の餃子にはがっかりした。

食後は町を歩いてみることにした。延川で一番の通りようで、街灯は少ないけれど、歩道に椅子を持ち出して、店番しながらお喋りや食事をしている人がいたり面白く、足元を気にしながらもあちこち覗いて歩いた。本屋さんと郵便局を探すのが目的でかなり歩いてみたが見当たらない。郵便局は2箇所あるが街の両端にあるようで、更に歩かなければいけないとのこと、行くのを諦めた。本屋さんは無いようだ。此処に限らず、街中を車で走っている時、気をつけて見ている、今までそれと分かる本屋さんを見かけたことはない。以前、ホテルのフロントで、このあたりに本屋さんは無いと言われて信じられなかったが、どうやらそれは嘘ではないようだ。

ホテルの方へ戻っていくと、ホテルと道を隔てて大きな広場があり、音楽を流してダンスを踊ったり、子供の乗り物をしつらえて有料で乗せたり、食べ物の屋台が出たりと賑やかだった。照明が少ないのでそれなりのムードが出て良いのかもしれない。きょろきょろしているうちに、この辺りが本場の棗を買う予定であったことを思い出した。今まで歩いたところでは、棗を売っている店を見なかったの、近くの雑貨屋さんに入った。この店は、昔からある便民店だが、ちょっと今風にして、日本のコンビニのようなシステムにしている。棗があるかと聞いてみると、棚の奥のほうから出してくれた。名産品を買ったような気がしなかったが、取り合えず確保した。

その後、広場の向こう側を透かして見ると、薄明かり



夜の広場

の中に棗を売っているらしい店が見えたので、早まって買ったことを後悔しながら行ってみると、店中に棗を並べた専門店が4,5軒並んでいた。棗の大きさや、仕上がり具合などで値段が違うようだが、余り良く分からないので、上等らしく見えたものを選んで2斤(1kg)ほど買った。これで、予定していた棗餡の月餅を作るための準備ができて一安心だ。

後は人ごみを掻き分けながら広場を横切ってホテルへ帰った。この金橋賓館には2泊したが、設備・サービス共にまあまあだったと言えるだろう。フロントデスクの係員が、我々をジロジロ見たりするのは、多分日本人など珍しいからだろうと許す気になったが、中国人の宿泊客が近づいても、仲間同士大声で私語を交わしているにはがっかりした。このホテルが昔国営だったのかどうかは知らないが、従業員の意識は、昔の国営企業の意識が未だに活きているのかと考えてしまった。

◆ 革命記念館

翌日は延川を離れる日だったので、先日紹介していただいた男性の剪紙作家、郭如林さんが見送りに来てくださり、郭さん、杜さん、周路さん、運転手の楊さん、我々4人の総勢8人で、昨日と同じように、屋台で朝食を摂った。

朝食後、杜さん、郭さんに見送られ、荷物を後部座席の中央に載せて延安方面へ出発した。延安にかなり近づいた所で、棗園鎮(村)にある棗園革命記念館を見学した。ここも、昨日見学した楊家溝革命記念館と同じで、共産党の長征に関する資料が展示してあるが、楊家溝の革命記念館と違うのは、参観者が圧倒的に多い点だ。昨日は、広い建物に我々以外の見学者は数えるほどしかおらず、じりじりと太陽に照りつけられて汗を流したが、今日の記念館は、緑の木立に囲まれ、記念館までの道筋にはお



延安革命記念館



革命幹部銅像

土産屋さんが軒を連ねて、活気に溢れていた。しかし、参観のルートが整理されていないので、革命軍幹部達の居室や事務所など、小さな部屋が棟割長屋のように連なっているところでは、狭い入り口で入る人と出る人が鉢合わせして身動きがとれず混雑に拍車をかけていた。

棗園と言う地名が示すように、この辺りで棗の生産が盛んなようで、みやげ物をお店が立ち並ぶ一角に棗屋さんがかたまっており、店員が棗を手に、客の関心を引こうとしきりに声をかけて来る。昨晚、一応必要と思われる量の棗を買ったつもりだったが、明るい太陽の下で見るとなかなか良い棗のように思えて、あれこれ比べながら、値引きの交渉を楽しみながら、更に買い足してしまった。

次に、我々が過日、必死の思いで辿り着いた延安駅を横目で見ながら、延安革命記念博物館へ行く。これは本当に立派な建物で、共産党の威信を充分に感じさせるものだった。床や壁面は綺麗に磨き上げられていて天井が高く堂々とした雰囲気は、北京でも時々見かけるロシア建築の影響を受けているようだ。革命終結後建設されたものだから、ロシア(ソ連)の影響は当然だろうと思いつながら、外は太陽がカンカン照りなのに、ひんやりとして落ち着いた内部の展示を見て回った。棗園ほどではないが、やはりかなりの人々が熱心に見学していた。

昼時をだいぶ過ぎていたので、途中のレストランに立ち寄り、香菇麵(椎茸麵)を食べた。お腹が空いていたのでとても美味しかった。その後、延安駅前でも水のボトルを補充して、いよいよ延安を離れることになった。延安の街には今回あまり縁がなかった。

博物館の見学以外延安の街を歩いていない。そうそう、旅の初日に、やっとの思いで延安に辿り着きバスから降り立ったのが、ここ延安駅前だったが、予定より大分遅れていたもので、周路さんに会うとすぐ車にのりこんで出発してしまい、街の雰囲気を感じる暇がなかった。バスが停まったのは延安駅前道路で、商店も並んでいたが、道路が広いせいか、または、我々と一緒にバスから降りた人々が、我々が周路さんを探してきよろきよろしている間に、皆見えなくなってしまったせいか、ちょっと寂しい街のように感じた。もう少し中に入り込んで、人々の生活が見える所を歩けば違う印象を持ったかもしれないが、我々にとっての延安は、歴史的な名前が先行している只の田舎町と言う印象だった。これからは、「延安」の名前を聞くと、きっと中国の鉄道サービスの不備を思い出すことだろう。

◆ 甘泉到着

ガイドブックなどで有名な宝塔山は、遠くから稜線に塔が聳えているのを見、駐車場まで行ったが、今回はパスすることにして、今晚の宿泊予定地である甘泉へ向かった。甘泉はガイドブックに載るような名所は無いようだが、我々はこの後西安へバスで行くことを予定していたので、この甘泉から西安行きのバスが出ているのを知ったので、周路さんをお願いして、宿泊を予定した。もう一つ、西安へ行く前に黄河の滝「壺口」へ行くのにも便利な場所だった。

午後4時頃には甘泉に着いて、甘泉賓館にチェックインした。この宿、設備は悪くなさそうだったが、チェックインしてみると、エアコンが動かないとか、テレビがつかないとかで、一部屋変更してもらい、一部屋は我慢することにして、やっと落ち着いた。一休みして、周路さんとの約束の時間、6時過ぎにロビーに下りると、そこには周路さんの友人で、それぞれ地域の民間芸術に貢献している4人の方々が待っていてくださった。

一人ずつ紹介をしていただいたから、車2台で出発、10分ほど走って鵬程萬里というレストランに出かけた。ここは素朴な田舎料理を出す店で、個室が用意されていた。

料理は美味しかったが、一品、青唐辛子の炒め物があった。「これは辛い」と言われたが、私は辛い料理を特別好きと言うわけではないが、少々辛くても食べられると自

負していたので、味わってみようと小さな唐辛子のかけらを口に入れてみた。すると、辛いのを乗り越えて、唇が痺れてきた。いわゆる「痺れる辛さ」で、食べて5分程は唇がヒリヒリして、口を閉じることが出来なかった。その後は何とか他の料理を食べることが出来るようになった。しかし、この唐辛子、私の体の中でも辛さを保っていたようで、大変尾籠な話だが、翌日トイレに行って、肛門の辺りにこの辛さを再び感じた時には本当にビックリした。正真正銘、初めての経験だった。

4人の方々はダイス遊びの道具を持ち込んで、一人ずつ全員を相手にサイコロを振り、出目数の少ない人がお酒を飲むゲームを始めた。全員が終わるまでかなりの時間がかかったが、わいわいがやがや、楽しい時間を過ごすことが出来た。初めてお会いしたとは思えないような和やかな雰囲気終始し、9時過ぎにホテルへ帰着して、明日は黄河の有名な滝、壺口見学に出発するので、朝7時集合と言うことで、解散した。

壺口は、去年の春節に山西省の平遥故城を訪れた時、

ついでに行く予定を立てていたのに、当日珍しい大雪で道路が閉鎖されて訪れることが出来なかったところで、今回は反対側、陝西省からの訪問を計画した。しかしこの壺口の文字、延川では余りにしなかった。関連の観光地としてホテルの観光案内などがあっても良さそうに思うが殆ど目にしなかった。ところが、ここ甘泉のホテルで、写真を担当して下さった渡辺栄子さんが面白い宣伝を見つけた。曰く「黄金の滝、壺口」と言う広告に、思わず笑ってしまった。しかし聞けばすぐに黄河の黄色い水が滝となって落ちる「黄金の滝」が想像できるすばらしいキャッチコピーだと思った。

明日を楽しみに部屋へ戻りシャワーを使おうとすると、お湯の調節が出来ないのを発見した。フロントに直してもらおうとしたが、何と、「水は出ないので、飲用水を使って冷ましてください」と言う返事が返ってきた。今まで何回か、ホテルのお湯が出ないとか、時間でお湯が止まってしまうというのを経験したが、お湯が熱すぎるのに水が出ないと言うのは初めてだった。 (続く)

私の四川省一人旅 [42]

理塘の街で 2

田井 元子

翌朝目が覚めるとバスターミナルに向かった。理塘では数日過ごすつもりだったので急ぐ理由も無かったが、民間の長距離バスを乗り継いで移動する貧乏旅行者にとって、その街のバスターミナルは重要な場所であり、まずは押えて置きたいポイントなのだ。康定に向かうバスが何時に何処から出るのか、チケットは幾らかなど必要事項の確認を済ませると売り場の壁に大きく描かれているバスの路線図をゆっくり眺めた。

理塘から東の方向へ向かうのは私の帰路となる康定行きシャンジャンのバスだが、南の方向に向かう郷城郷城行きのバスに乗れば、旅行者には人気が高いが私は未だ訪れた事の無い、憧れの雲南省に抜ける事ができる。西に向かうバスバータンに乗れば、到着点の巴塘は正真正銘のチベットエリア、チベット自治区の目と鼻の先だし、北を目指せばカム北部の中心地のひとつである甘孜、その奥には色達ガンゼという土地があり、その付近にはチベット仏教宗派の一つである、ニンマ派によるチベット最大級の僧院があるのだという。成都で知り合った日本人旅行者の持っていたガイド本には、まるで一つの大きな街ほどの規模で形成された、寺の要塞の様な僧院の集合体がカラー写真で紹介されていて、私は驚きに目を奪われたものだ。そんな私がまだ見ぬチベットの奥地には、きっと下界に暮らす私達の想像を超えたディープな世界が広がっているに違いない

ああ～～、このままずっと、旅が続けられたらいいのに～～～!!! 何処の土地に旅していても旅の折り返し点を過ぎる頃になると、必ず感じる事となるやるせない想いを飲み込んでチケット売り場の建物から出た私は、朝食を取る為にバスターミナル脇に軒を並べている食堂の一軒に入った。

ガラス戸にペンキで書かれている漢字のメニューから「〇〇鍋豆腐」といった料理名を見つけて注文し、料理が出てくるのを待っていると、一人の西洋人旅行者の男性が店の表で売っていたホットケーキのような形のチベット・パンを数枚購入し、それを炭火で焼いて暖めてくれと頼んでいた。店の店員達は英語を解さず、話が伝わらずに四苦八苦している男性を見かねた私が横から通訳の合いの手を入れると、ヤレヤレ…というような顔をしてみせた彼は両手を胸の前で差し上げ「中国は英語が通じないから旅も大変だ」と苦笑いをした。パンを焼いている間に話をしてみると彼はアイルランドからやってきた旅行者で、四川の旅では食事が合わずに苦労しているのだという。

「俺はベジタリアンだし、中国語も解らないから何を食べたらいいのか判らなくて、毎日三食このパンだけを食べているよ」

「ええー、だって野菜の包子とか、スープとか、豆腐料理とか、ベジタリアンでも探せば美味しい物はいろいろ

あるわ!」

「中国語のメニューは全く解らないし、以前に点心のような物を食べてみたら腹を壊したんだ。もうゴメンだよ」

だが彼が毎日食べているというチベット・パンは私も以前食べてみた事があるのだが、どうにもボソボソでカチカチで、それを常食にしているチベット族の人には申し訳ないが、ちょっと美味しいとは思えない物だった。「俺だって美味しいと思ってる訳じゃないが、パンならとりあえず安心だし、ただ腹を満たす為だけに食ってるのさ」

ええ～～、せっかく外国に来て珍しい食べ物を試してみるチャンスに恵まれてるのに、何て勿体無い事を～～!

でもそういえば・・・以前マレーシアのジャングルにトレッキングに行き、その場で知り合った西洋人旅行者とグループを組んで数日過ごした時の事を思い返してみれば、彼等の食生活もずいぶんと保守的だった。

食堂に行けば美味しいマレーシアのローカルフードが溢れているというのに、彼等が好んで毎日食べていたのはハンバーガーとフライドポテトにコーラで、未開の味に挑戦してみようという気持ちなどあまり起こらないらしい。そういえば日本に滞在している各国の外国人を思ってみても、一部を除いた殆どの国の国民はやはり毎日自国の食べ物を食べているようだ。

それに比べて世界中の味が集結しているような東京の繁華街を思い浮かべてみれば、中華、フレンチ、イタリアン、インド、アジア各国のエスニックにトルコ、アフリカン・・・等々、もしかしたら日本人ほど食に対する好奇心が旺盛で他国の味を積極的に許容する人種は、世界中でも珍しいのかもしれない。そんな事を思っているうちに私の頼んだ料理が運ばれてきた。名前から想像した通り、熱々に焼かれた土鍋の中で豆腐や野菜がぐつぐつと煮こまれていて、とても美味しそうだ。

話しているうちに親しみが湧いてきたのか、アイルランドの男性も持ち帰ろうとしていたパンと一緒に座って食べ始めた。取り皿を貰い、私のところに運ばれてきた鍋の料理を「豆腐と野菜だから試してみて」と勧めるとかなり気に入ったようだ。

「こんな料理があるとは知らなかったよ」と言う彼に、ガラス戸に書かれている料理名を彼の手帳に写し取り「次回はこれを食堂の店員に見せて注文すればいいよ」と言うと、ナイス・アイデア!と笑顔で親指を立てた。食事が済むとアイルランド青年は店を出て行ったが、私にはもう一つの目的の為まだ店に居残っていた。今日の予定は何といっても、昨日北京軍団の車中から見かけた岩山である。実は三年前の旅でも烏里氏に伴われチラツと訪れていた場所だった。

なだらかに続く高原の中に突然ヌツと地面からせり出してきた様な石灰岩質の岩山全体には、そこが神の場所である事を示すタルチョがグルグルと巻きつけられていて、只でさえ岩山好きな私の目を惹くのだが、更に面白いのは岩山の中腹辺りの側面に洞窟が口を開けているのだ。この岩山の内部には鍾乳洞があり、山の裏手から洞窟の入り口によじ登ると迷路のように枝分かれしたトンネルを進んで、岩山の表側に顔を覗かせる事ができた。分岐している洞窟の内部には神への捧げ物なのか水牛のドクロが安置されてあったり、そこに住みついたコウモリの糞が山のように堆積している部屋があったり、何処まで通じているのか判らないようなトンネルが岩山内部に延びていたり、とにかくこの山は怪しく秘密めいていて面白い。

あまり人には理解されないが、私はバイクで日本のアチコチを旅していた時代に旅先でたまたま入った鍾乳洞の不思議な魅力に取り付かれ、その後は各地の鍾乳洞を求めてバイクで九州やら東北やら本州の端から端まで走り回ったほどに鍾乳洞が好きなのだ。そんな私が何の予備知識も無くそんな場所に連れられてきて狂喜しない筈が無い。早速岩山を駆け上がり洞窟の中を進んで表の岩盤から顔を出しヤッホーと叫んでみせたが、私以外のメンバーはそれほど岩山にも鍾乳洞にも心を動かされていない様子で、そこは団体行動の悲しさ故、すぐに「では行きましょう」とその場を後にしなければならなかったのだ。引きずられる様にマイクロバスに押し込められ、この地を去ってゆく私は大変に大変に不満だった。

そう簡単に来られる場所じゃないんだから、もっとじっくり探検したかったのに～!!! とにかく一度気になってしまうと、自分の心行くまでそれを味わいつくさなければ納得のいかない私は、その日のバスの中で心に誓っていたのだ。「いつか絶対、一人でこの場所に舞い戻ってきて、好きなだけこの岩山で遊んでやる――!!!」

だが四川省二度目の旅となる今回、心に刻んだ誓いは北京軍団によってくだんの岩山に気付かされるまでスーッカリ忘れていた全く際どい一瞬であった。あのまま車の中で居眠りしていたら、その事は忘れたまま日本に帰ってしまったに違いない。何だかんだ言いながらも北京軍団には感謝感謝である。だが、問題なのは街から離れた高原の真ん中にニョッキリ聳えているあの岩山まで、どうやって一人で向かえば良いのか・・・、私がまず思い浮かべたのはバイクだった。それまでに数え切れない程出会っていた、チベット版イージーライダー達が長い髪をなびかせながら気持ち良く高原の道路を飛ばしているのがとても羨ましく印象的だったからだ。

道は一本道なので、バイクさえあれば誰でも迷う事無

く岩山まで走っていける。この何処までも続く大草原の中を風を切って・・・これだけバイクが普及している理塘の街だ、泊まっている宿の従業員や街のバイク屋などに相談してお金さえ払えばバイクをレンタルする事など容易な気がした。バイクがあればあの岩山だけじゃなくて、もっと色々な場所に縦横無尽に走っていける・・・

自分の思いつきに思わずウットリしてしまった私だが、冷静に考えればやはりそれはあまりにリスクの高い行為だった。理塘は標高が4000メートルにもなる高原地帯なのだ。天気が良ければいざ知らず、ひとたび天候が荒れば夏でも雪やヒョウが降ってくる。亜丁村で少年のバイクを倒して壊してしまった事を思えば、舗装状況も良くない道路で同じ様なアクシデントが起こる事は容易に予想されるし、カーブの道でもなりふり構わずスピードを出して飛ばしまくるこの土地の人間の運転を思えば事故も怖い。どの程度手入れされているか判らない中国製のバイクの精度も心配だ。もし街から遠く離れた場所でバイクが故障でもしたら、日本のように手近に駆け込めるガソリンスタンドなど皆無だし、そのまま外で一晩過ごす事にでもなれば氷点下にもなる気温は命にかかわる。

うーん・・・夢から現実に引き戻された私が次に考えられる方法は、やっぱりタクシーしかなかった。昨日北京軍団の車から岩山を見た時は、その後わりとスグに理塘の街並みが見えて来た筈だから、それ程遠い場所ではないだろう。

いきなり街を流しているタクシーに交渉する前に、あの岩山までタクシーで行けばどのくらい時間がかかり料金の相場は幾らくらいなのか、どこでタクシーが拾えるのか、まずこの土地の人間に聞いて確かめたかった私は、明るい笑顔で気の良さそうな食堂の女将の手が空くの見計らって声をかけてみた。女将の話では、岩山は扎嘎(サガ)神山と呼ばれているらしかった。

「そこまでタクシーで行きたいと思ってるんだけど・・・」

私がそう言いかけたとたん、店の奥にいた小柄な男が勢い良く駆け寄ってくると「俺が連れて行く！俺のタクシーに乗ってくれ！」と私の前に飛び出してきた。

「いくら？」

「80元！」

旅行者だと思って足元を見ているのが見え見えだ。

「高～い!! お話にならないわ！」

私がそっぽを向くと

「70元！いや60元でもいい！」

必死に喰いついてくるタクシーの運転手を横目で見ながら、私達のやり取りを苦笑して眺めている女将に向かって「そんなにしないでしょ!? 相場はいくらなんで

すか？」と訪ねると、女将は笑いながら

「友達に電話してあなたを乗せてくれるか聞いてあげるわ」

と受話器を取り上げた。

慌てたのは運転手だ。

「待ってくれ！50元、いや40元！」

電話が繋がって女将が友人であるタクシー運転手と話し始めた。

「いや、30元!! 20元でもいい～～～！」

まるでバナナの叩き売りだ。よっぽどお客が欲しいのか頭を抱えながら悲鳴のような声をあげているのが可笑しくて思わず笑ってしまったところで、女将の電話が終わった。

「私の友達は今、手が空いてないそうなの」

俄かに元気を取り戻した運転手は

「小姐！やっぱり俺の車に乗るしかないな！」と強気な笑顔で勢いを盛り返してきた。何だか憎めない人物で、この男の車にのっても良い気がしてきた私は

「いいわ、20元よね」

念を押すと、

「いや30元だ」と言い返す。

「あなた、たった今20元でいいって言ったじゃない！」

呆れながら声をあげる私に、また大げさに頭を抱えて見せる運転手を笑いながら店の女将が助け舟を出した。

「小姐、30元なら良いわよ。この辺の人間が乗ってもあそこまでは30元よ」

女将の一言で交渉が成立すると、準備をしてから此処に戻ってくるからと約束して私はいったん宿に戻った。出かける為の荷物をまとめて宿の廊下を歩いていると、もしや日本人ではないかと思われる青年が廊下にいるのに出会った。あ！彼も誘ってみようかなー、人数が多い方がタクシー代も安く上がるし、街の郊外に向かうタクシーに一人で乗るよりは仲間がいた方が安心だ。久しぶりに自由に会話できる自国の人間と話したい気分にもなっていた。青年と目が合うのを捕らえようと暫く廊下で所在無くしていた私だが、どうやら彼は意図的に私の視線を避けている様子で声をかけるキッカケが掴めない。面倒になった私はやはり一人で宿を出た。

歩いて数分の場所にある先ほどの食堂に戻ると、約束どおり運転手は車を準備して待っていてくれた。理塘の高い高い空は相変わらず抜ける様な群青色だ。走り出した車はスグに街中を抜けると左右どこまでも緑の絨毯が続く草原の真ん中を車はすべるように走っていく。美しい風景、明るい日差しに気持ちが高揚してくる。やっほー!! 三年前の想いを果たすべく思い出の岩山リベンジに出発だ～～～!!!

(次号に続く)

日本の生活

叢春そうしゅん(中国山東省威海出身2010年9月来日 国士舘大学21世紀アジア学部21世紀アジア学科1年生)

日本へきてもう二ヶ月になりました。日本の生活にだんだん慣れてきました。

最初日本へ来たとき、一番困ることは電車に乗ることです。私は方向音痴ですからよく道に迷ったり、違う電車に乗ったりしてしまいます。ある日、友達がせっかく池袋から遊びに来ました。私は学校のバスで駅まで迎えに行きました。五年ぶりですので、話しながら歩いて帰ろうと思いましたが、つい道がわからなくなってしまいました。結局、普通三十分かかる道は二時間かかりました。「もう二度と来ない。」友達は困っている顔をして言いました。

それから、日本の物価は本当に高いです。特にトマトです。6個で398円です。中国の10倍です。国の好物ですが日本であまり高くしてほとんど食べていません。でも、スーパーは夜七時か八時のとき、物が安くなります。その時は必要かどうか別にして、まず買います。それに少し幸せな感じがします。

日本の大学の生活はそんなに忙しくないです。空き

時間を利用して、自分のほしい物が買えるようにバイトをしたいと思います。バイトを探すとえば、正に涙も出るほど凸凹の道でした。日本へ来たばかりだし、日本語もあまり上手じゃないし、何回も壁にぶつかりました。幸い、日本にいる友達はよく電話してくれたり、慰めてくれたりして、いろいろお世話になりました。先週やっとバイトが見つかりました。中華料理の店です。ガラスを割ったり、お客様に違う料理を出したりして、いろいろ大変ですが、将来の貴重な経験になっていいじゃないかと心からそう思います。

日本の大学生生活は楽しいです。先生方も親切だし、たくさん友達もできるし。レポートは大変だそうですが頑張れば何とかできると思います。

今はバイトをしながら、大学に通っていて、充実した生活をしてすごく満足しています。日本の生活は楽しくても、辛くても、私のこれからの人生に大変役に立つと思います。
(原文のまま)

《'わんりい' 掲示板》

モンゴル・ツァガンサル(旧正月) 〈チャリティコンサート〉

馬頭琴奏者のA.バトオチル三はモンゴル・アジアの民族楽器を伝承する為、「民族楽器歴史博物館」建設のチャリティコンサートを各地で行っています。



2011年1月28日(金)、8:45開演(開場:18:15)

▲会場：文京シビックホール・小ホール(全席自由席)

〒112-0003 文京区春日1-16-21

丸ノ内線&南北線:後樂園駅下車/三田線&大江戸線:春日駅下車、各々徒歩3分/JR総武線 水道橋駅下車10分

▲参加費：大人3000円(前売2500円)/子ども1000円

▲出演：アラーンズ・バトオチル(馬頭琴)、バダム・ポロルマー(揚琴)、

パータルジャヴ・ポルドーエルデネ(ホーミー)、エルデネ
パータル・ジャヴハー(舞踊)

▲問合せ：☎03-5934-4689(横田幸子)

☎04-2942-2018(光井紀子)

主催：ツァガンサルチャリティコンサート実行委員会

何故か分からないが懐かしい、消え行くものへの鎮魂の詩
映画「**ジャライノール**」(監督：趙暉)
(2008年中国 カラー 92分)

<http://www.cinematrix.jp/jalainur/director.html>

釜山国際映画祭2008 国際批評家連盟賞/上海国際映画祭
2009 アジア新人賞/シンガポール国際映画祭2009 批評家賞・
最優秀撮影賞・他

蒸気機関車と炭鉱の町・ジャライノール。ここはロシアと国境を接する内モンゴルの極地だが、蒸気機関車マニアははるばるとこの地を訪れる。赤茶けた草原をもくもくと煙を上げて走る真っ黒な蒸気機関車、それを見るだけで良い。そして人生を刻み込んだ老機関士の無言の横顔が惚れ惚れと良い。(田井)

- 2011年1月15日(土)～
- 於：ポレポレ中野(中野区東中野4-4-1ポレポレ坐ビル地下)
- 10:45/12:50/14:55/19:00
- 特別鑑賞券：1400円発売中(蒸気機関車ミニポスター付)
- 当日：一般 1,700円 学生 1,500円

■【ジャライノール公開記念】<http://cift.net/index.htm>
〈中国インディペンデント映画特集〉

- 2011年1月15日(土)～2月4日(金)連日17:00～
- 於：ポレポレ中野
- 当日券のみ 一般1,400円 大・専・高・中・シニア1,000円
- 「ジャライノール」の半券提示で一般のみ200円割引

使用済み古切手と書き損じの葉書で支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

春を待つ、早春のミニコンサート

Emme(唄) & 小濱明人(尺八)

* 声を気持ちよく出すワンポイントレッスン付き

Emme：東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

小濱明人：NHK 邦楽技能者育成会第46期修了。第2回尺八新人王決定戦優勝。スウェーデン国際吹奏楽フェスティバルに招かれ参加し、1カ月に及び欧州ツアーを成功させるなど、海外公演も多く、欧米・アジア・オセアニア・アフリカなど計25カ国で行っている。

- **日時**：2011年2月18日(金) 13:15~15:00
- **会場**：野津田の隠れ里・乃平庵 (参加の方に地図を送付) 鶴川駅からバス、野津田車庫下車20分。野津田公園駐車場から徒歩10分。鶴川から野津田公園駐車場への送迎可)
- **参加会費**：
 - ①ライブ&乃平庵健康ランチ&ティ・タイム 3,000円
 - ②ライブ&ティタイム 2,500円
 * 参加会費には、会場使用の謝礼が含まれています。
- **募集人数**：上記①と②の合計で、先着20名まで
* 20名になり次第締め切ります。
- **当日スケジュール**：
 - ▶ 11:30~12:30 ランチ
 - ▶ 13:15~15:00 ライブ(レッスン含)
 - ▶ 15:00~15:30 ティータイム

* ランチを召し上がる方は、11:20までに乃平庵へお出で下さい。
* ランチを召し上がらない方は、12:45までに乃平庵にお出掛け下さい。

● **申込**：'わんりい' ☎042-734-5100

【講演会】 パレスチナに20年以上通い続けている映画監督/写真家・古居みずえが語るパレスチナの子どもたちの今！

映画

『ぼくたちは見た ~ガザ・サムニ家の子どもたち~』の撮影を通して **【参加無料 先着40名】**

- 2011年1月22日(土) 13:00~15:00 (開場: 12:30)
- ▲ **会場**：町田市民フォーラム4F講習室
- ▲ **主催**：(財)町田市国際交流センター(担当: 国際協力部会)
- ▲ **申込**：(財)町田国際交流センター
☎047-722-4260 (日曜・祭日を除く9:00~)

ドキュメンタリー映画による国際理解講座

「地球のステージ~ありがとうの物語」(参加無料)

世界中で絶えることのない紛争や貧困。精神科医・桑山紀彦氏が映し出す明るく懸命に生きる子どもたちの姿。

2011年1月23日(日) 14:00~16:00

- ▲ **会場**：町田市民フォーラム3Fホール (定員: 180名 申し込み順)
- ▲ **主催**：(財)町田市国際交流センター
申込方法など詳細問合せ：(財)町田国際交流センター
☎047-722-4260 (日曜・祭日を除く9:00~)

【1月の定例会】 ◆ 1月17日(月) 13:30~ (田井宅)
◆ 2月はおたより発送はありません。

中国第11回全国美術展受賞優秀作品による

現代中国の美術

卓越した技術と多様な展開を見せる中国現代美術の粋

会場：日中友好会館・美術館

会期：2011年1月22日(土)~3月13日(日)

- 会期中で展示替えがあります。
前期：1月22日(土)~2月15日(火)
後期：2月17日(木)~3月13日(日)

● **開館時間**：10:00~17:00

● **休館日**：水曜日

● **入館料**：大人400円

学生200円

小学生以下 無料

(前・後期共通券 大人: 700円)

(前・後期共通券 学生: 300円)



- **ギャラリートーク**：日時：2011年1月22日(土)
- **来日した作家によるギャラリートーク** (詳細未定)
- **主催**：財団法人日中友好会館、中国美術家協会
- **後援**：中華人民共和国駐日本国大使館、(社)日中友好協会、(社)日中協会 他

【問合せ】 財団法人日中友好会館 文化事業部

〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3

☎:03-3815-5085 FAX:03-3811-5263

E-mail:bunka@jcf.or.jp

張春祥京劇教室 / 洪剛鑼鼓教室 **【合同京劇発表会】**

※ **入場無料・京劇レクチャー付き**

世田谷区・世田谷区教育委員会後援

日本人が舞い、日本人が伴奏し、中国の伝統演劇・京劇へ挑戦!

2011年1月23日(日) 16:00開演(予定)

会場：烏山区民会館ホール (京王線「千歳烏山」駅北口前)

【京劇演舞】 扈家荘 / 打焦贛 / 二將軍 (伴奏: 鑼鼓教室)

- ▲ **ゲスト俳優**：張烏梅 (新潮劇院)
- ▲ **ゲスト奏者**：許佳 (京胡)、錢騰浩 (ソナ)
- ▲ **京劇指導**：張桂琴、張春祥

- **演舞**：浅倉香、加藤光一郎、貴船恵子、坂本貴子、長慶子、田崎満耶子、塚田拓也、樋口理世 吉田活世
- **鑼鼓教室**：司鼓：洪剛、川口和美、川口洋一、榊原潔子、鈴木千佳子、高島正子、薦谷有希子

■ **問合せ**：TEL/FAX：044-953-3622 (川口)

とっても美味しいシュワンヤンロウ **2011 'わんりい' 新年会**



於：麻生市民館・料理室

2010年1月30日(日) 11:00~14:00

- **定員**：先着40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ)
- **1500円** (会場費、シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- **新年会メニュー**：1.「羊肉のしゃしゃぶ」を囲んで歓談
2.ビンゴ 3.お笑い福引 4.他
- **申込**：メール：wanli@jcom.home.ne.jp
TEL/FAX：042-734-5100 (田井)